

害鳥から豊かな環境のシンボルへ 人々の挑戦の物語

評者 中貝宗治 (兵庫県豊岡市・前豊岡市長)

農業使用や湿地消滅等の環境破壊によって一度日本の野外で絶滅したコウノトリ。両翼2mのその大型の鳥を再び野に帰す取り組みは、人々の冷やかな反応の中で始まった。しかし今、400羽近いコウノトリが日本の空を舞っている。

この本は、野生で絶滅した動物を人工飼育で増やして再び人里に帰すという、世界初の事業に対する豊岡の人々の挑戦の物語である。そのねらいは、コウノトリも棲める豊かな環境の創造にあった。著者は、豊岡市職員として長年コウノトリの野生復帰に向けて奔走した中心の人物である。なされるべきことは山ほどあった。飼育下での繁殖、農業に頼らない農法の確立と普及、生き物が棲む川づくり、環境教育等々。何よりも野

生復帰を目指す明確な理念の確立。一方で「コウノトリを保護する仕事は、人々のくらしのまっただ中」にある。かつてコウノトリはイネの苗を踏み荒らす「害鳥」であった。また、草はあつという間に田んぼを覆ってしまう。除草剤(農薬)を使わずに米をつくることは大変な重労働だ。日々の暮らしの中で、コウノトリの保護以外になすべきことは腐るほどある。

著者たちは、その強固な生活の論理に辛抱強く耳を傾け、うなずき、ときに自身の甘さを確認しつつも、人々の目を少しずつ未来に向けるように促していった。「害鳥」は、やがて「豊かな環境のシンボル」へと変貌を遂げ、大空に飛び立った。コウノトリ野生復帰のプロセスは、対話と情熱の連鎖の物語とし

て描かれている。その過程で追い求められたのは、「豊かさとは何か」という問いへの答えであった。読み進むうちに、野生復帰を目指す理念が対話と実践の現場から集合知として立ち上ってくる。

私たちは、社会は変えられないという、あきらめのような気持ちを抱きがちだ。しかし、達成したい未来への情熱と戦略があれば、スタート時において少数派であったとしても、自らの成長を伴いながら事態は動かしうる。その希望と勇気をこの本は与えてくれる。



『コウノトリと暮らすまち 豊岡・野生復帰奮闘記』

佐竹節夫 著
農文協 2200円(税込)